

新刊紹介

齋藤正二著

『牧口常三郎の思想』

牛 田 伸 一

「執着以外の何物でもない」

記憶の糸を手繰り寄せてみると、『牧口常三郎の思想』の著者、齋藤正二との出会いという僥倖に本書の紹介者が恵まれたのは（先生が本書でよく使われている表現である）、おそらく1994年だったと思う（驚くことに、すでに15年の月日が流れているではないか！）。先生は1925年生まれだから、その当時すでに70歳ということになる。出会いの場所は創価大学B棟4階の教室で（おそらくB402）、教育哲学の講義が行われていた。先生は講義中によくご自分を「もうすぐ定年どころか、人生のそれがやって来る爺（じい）」だと繰り返していた。でもその言い方は、それこそ人生に悩む20歳そこそこの受講生たちを尻目に、これがまたすこぶる元気で、どこからどう見ても「人生の定年」とはしばらく無縁だよなあーとしか思われなかった（先生は、当時すでに複数回にわたる大病（癌）を克服されていた。紹介者がこのことを知ったのはしばらく後である）。先生には少し申し訳ないけれども、齋藤正二という人物の第一印象は「生命力溢れたかなり不思議な教授先生」（これでもかなり控えめに表現させていただいた。あくまで第一印象である。どうかお許しいただきたい）とでも表現できようか。

講義の何週目だったかはあまり記憶がないが、先生が学生を厳しく叱った週があったことを鮮明に覚えている。授業で牧口常三郎『人生地理学』の「緒論第一章 地と人との関係の概観」（緒論を「ちょろん」と読み上げた学生に「しょろん」と読むのだと、歌手森進一の「おふくろさんよ」という台詞を例にしながら、ご教示されていたこともまた思い出深い）を講読していたとき、最後列のドア側の隅に座る学生が、いわゆる「内職」をしていて、それに先生は偶然にも気がつかれたからだ。お叱りはいくぶんなりとも感情的ではあったけれど、理不尽というわけではなかったと思う。それは、自分のような浅学ではなくて（先生がご自分でそう言われたのであって、わたしが「浅学」などと創作したわけではない）、創価大学の淵源の牧口が書いたものなのに、そこで学ぶ学生の君がそんなことをして彼に失礼だとは思わないのか、という趣旨だった。「内職」に使われていた本を取り上げたとき、先生はその学生が『人生地理学』（第三文明社刊『牧口常三郎全集』第1巻）さえ用意していないことに気がつかれた。ここで先生の怒りは高まること最高潮となり、その勢いは紹介者を含む他の学生にも及んだ。受講生の手元にテキストがあるかどうか尋ね、その結果ほとんどが購入できていない事態が知られるところとなった。先生の激昂は転じて落胆へと急降下し、寂しそうに気を取り直す努力をして、講義を再開された。けれどその日の「緒論」の講読はほとんど

進まなかった。

次週の講義、受講生の人数は多少なりとも減った。学生の抗議だったのかも知れない(なるほど、いまの大学ならアウトになること確実である)。けれども、あの日以後授業に来なくなった学生が、いまでも先生を「怒れた(イカレタ)爺」くらいにしか考えていないのかと思うと、とても残念な気持ちになる。その日先生は、研究室から山積みの『人生地理学』を腕いっぱい抱え、一人で教室まで二往復されたからだ(たぶん40冊以上はあった)。「みんなが買えないのであれば、ぼくが買えばいいことに気づきました。最終講までこの『人生地理学』を貸し出します」と言われた。そしてこう付け加えた。できればお金に余裕があるときに買ってほしいということ、もしも生活が苦しいなら、先生のご自宅のお庭にあるチューリップ畑の草むしりをすれば、アルバイト代を出すから、そのお金で買ってほしいということ、自分の身を切りながらそれでも学究を貫くことがきっと大切なのだということ、などだった。こうして先週と同じ箇所から、「緒論(しょろん)」の講読が再スタートした。でもそのスピードときたら、葉っぱの上の芋虫のごとき歩みだったけれど。

紹介者は牧口常三郎の著作を紐解くと、今でもこの型破りな知識人のことを思い出す。激昂した顔や教卓に山積みにされた『人生地理学』が目につかぶ。(先生のおじいさんギャクで)「思い出し笑い」をしつつも、同時に真摯な学究的姿勢に襟を正される思いがする。先生は何の飾り気もなく、ただ本気になって学問という探究路を進んでいたのだ、と考えてみたりもする(学問に対しても学生に対しても、どうでもいいと思っていたら、怒りの感情なんて出て来ようがない。それゆえ反対に、創価大学の学生が牧口に見向きもしないことを知った時の先生の落胆は、計り知れないものではなかったかと、今になって推察したりもする)。

実際に斎藤先生の汲み尽されることなきこの探究心が、《完全復元》版『牧口常三郎全集』(第三文明社)が編まれる基幹動因となったことを、紹介者はここで確認し記しておかなければならないと思う。先生蔵書の牧口初版本コレクションの数々が、この『全集』の底本になったからである。これについては、本書第三部「牧口常三郎研究ノート」の「雑纂」に詳細を参照し得るから、是非ともその一部をお読みいただきたい。

自慢話に墮するのを慎みたいが、本全集が底本に仰いだ『人生地理学』初版も、『教授の統合中心としての郷土科研究』初版も、同改訂増補版も、『地理教授の方法及び内容の研究』初版も、それから『創価教育学体系』全四巻の初版も、すべてわたくしの所蔵にかかる。牧口先生御自身の著作ではなくて序文を冠されたのみの戸田城外著『創価教育学原理による推理式指導算術』や戸田城外・山田高正著『推理式読方指導』も、わたしの所蔵にかかる。わたくしとて、まさか、牧口常三郎の単行著作の蒐集を始めたときには、将来己がコレクションが《完全復元》版の『牧口常三郎全集』完成に役立つとは、想像だにしなかった。……/それならば、現在、殆ど全くひとびとの手に入らぬ牧口常三郎の著作物を、何時どのようにして蒐集し得たのであるか——。わたくしの答えは、率直単純に、二十余に亘る執着以外の何物でもない、ということにしておく。いかに執着の火を焚こうと、時間をかけねば、目的は達し得ないし、一方時間を費やしても集中的燃焼を欠いている場合には蒐集上の“好運”に恵まれずに終わるから、好運に対する感謝をも忘れてはならないが。(723頁、下線・傍点は引用者による。)

本書『牧口常三郎の思想』には、著者である斎藤正二自身が「執着以外の何物でもない」とまで表現した半世紀近くにわたる牧口常三郎研究（とりわけ1990年代半ばごろから）の成果が収められている。紹介者は、著者の論述プロセスの背後に、知的探究のエロスを垣間見る。著者に対する親近感を禁じ得ないから、その点しっかりと引き算することをお願いした上で、この著作の醍醐味を次のようにまとめておこうと思う。それは、創価教育学体系と近代日本に駆け入った西洋の知的巨人による学的営為との間を、著者によって仮設された両者の関係の蓋然性（英: probability 独: Wahrscheinlichkeit）が高まるべく、一次資料の駆使に基づき関係づけて、この布置を同定しようと肉迫するプロセスそのものにある、と。

『牧口常三郎の思想』の（簡単な）案内

734頁の大部を頭から読破しようと意気込む読者がいるとすれば、それは素晴らしいことであるし、是非そうしていただきたいと思う。『牧口常三郎全集』を机の横に並べ、引用箇所を確認しつつ実際に頭から読みふけた紹介者は、詳しいことは飛ばして正直に言うと、大変に骨が折れたあーと告白する（読むだけでこうなのだから、著者はどれほど大変だったろうかと思ってみる。）。それでも骨折り分の（知的）儲けは計り知れない。そうは言っても、すべての人がすべてそうできるとも限らないので、案内程度の解説は、読者のお役に立てるのではないかと思われる。

第一部では「創価教育学の基礎理念」の見出し語の通り、数々の基礎理念が比較的平易に解説されているから、初学者は著者のまなざしから創価教育学の核心部分に迫ることができると思う。すでに、2010年11月18日付の聖教新聞紙上において、麻生千明先生（足利工業大学教授）が指摘されていたように、著者は、創価教育学があくまで「知識体系」であることを力説し、そしてまた主知主義者としての牧口常三郎を描き切っている。さらにこうした「知の人」としての牧口の横顔は、同時に「信の人」としての横顔に重ね合わせられる。著者が試みるのは、「信の人」としての牧口常三郎を「知の人」としての牧口が媒介するという、両横顔の布置であった。

——牧口常三郎は「信の人」にしてかつ「知の人」でありました。この場合、「知の人」とは自己の失敗や誤謬を公平直截に認めてその修正＝訂正に努める人類普遍の最高の理知を具有する精神的生命体の義で用いております。／天才なればこそ牧口は斯かる人類普遍の理知を棄けて生まれたとの見方も成り立ちますが、一方、明治日本の思想史的霽れ間に少時射し入ったヘルバルト教授学理論の燦然たる明光を心身一杯に吸収した僥倖を十分に生かしたとの見方も成り立つ。ベーコン、デカルト、カントの正式遺産相続人（＝嫡子 der Erbe）たるヘルバルトを、百パーセントの精度・正確性で継承＝受容したものが牧口思想（地理学と教育科学と価値論の三位一体システム）である以上、それが人類普遍性に満ちているのは、極めて理に適ったことです。「知の人」にしてはじめて「信の人」たり得る、と言ひ直せば、いっそう理に適うでありましょう。（47頁、下線・傍点は引用者による。）

この引用には、牧口が「知の人」であるがゆえにこそ「信の人」であった、という命題の蓋然的な理由が、ヘルバルト教授学理論を吸収できたという幸運を生かしたことにあったとされている。このヘルバルト教授学理論を牧口の「価値論」の源泉として捉え、その炙り出し作業を丹念な資料的追跡を通し成し遂げたのが、「第二部 創価教育学の知的源泉——ヘルバルト実在論、キル

ヒネル教育学、デュルケム社会学」の主な内容である。著者の問題関心は次の文章に表現されている。「教育学は“二番煎じ”“三番煎じ”の甚だつまらない学問かもしれないけれど、それをとおして、“第一級品”の妙味＝醍醐味に触れる機会に恵まれることも絶無とはいき切れない。……、ヘルバルト教育学と取り組んでいるうちにカント批判主義哲学の骨子を会得し畢せてしまっていたりする、そんな確率も零とは断じ切れない。まさに牧口常三郎の場合がそれであった」（123頁、傍点は引用者による）。「それであった」牧口の「価値論」とそれを構成せしめた知的材料の提供者である西洋の知的巨人の両者が、どのように学問的関係を取り結んだのが、論じられ究明されている。

400頁を超えるためばかりでなく、牧口の「価値論」がヘルバルト実在論を橋渡しにカント哲学に遡及し得るといふ帰結へと、実証的（あるいは《書誌学的》といってもいいのかもしれない）にアプローチした専門的研究であるため、読破には格別の努力が不可欠となる。さらに中盤過ぎには、プロイセン・ドイツのカトリック中央党の特性にまで話題が広がっていくことを考えると、第二部の中心のかつ要約的な役割を持つ「第一章 ヘルバルトの実在論 I——ヘルバルトを正しく理解した少数者のひとり・牧口常三郎」の内容を逐一確認しながら、先へ先へとゆっくり読み進めることも必要になるかもしれない。たしかに、著者が牧口と西洋哲学者との間の関係に肉迫するプロセスそのものが、本書の醍醐味であると先に述べた。しかし、難解さや全体構造の見通しの悪さゆえに、第二部で挫折し二度と本書の頁を捲らなくなるようなことがあっては誠に残念である。だから、もしもここを難解に過ぎると思われる読者がいたら、第三部を先に読むこともあっていいかと思う（こんなことを書いたら、斎藤先生に叱られてしまうだろうか。）。

「第三部 牧口常三郎研究ノート」には、著者の講義記録、インタビューそして寄稿記事がまとめられている。とくにその第三章以降は語り口が柔らかいから、そちらを読破し勢いをつけ、返す刀で第一章と第二章に腕まくりをして斬りかかってもらいたい。

とりわけ第三部「第二章 二育vs.三育という問題」は、紹介者の個人的な問題関心からも大変に興味深かった。日本近代学校教育の普及のプロセスで、知育と体育という「二育」に徳育が+（プラス）され、「三育」がでっち上げられていく過程が微細に明らかにされているからである（徳育のゴリ押しに水戸学が関係していたとは！）。著者によると、いまも昔も「知・徳・体」の「三育」が常態化しているばかりでなく、知育が「知育偏重」の合言葉の下、徳育に押しのけられている有様である。「知育偏重」は欧米心酔のせいだから、日本人としての徳育・心の教育こそ大事だ、などと道德教育を高らかに謡う人々に限って、《教育万能》や《教育無謬》という前提に沈み込み、ここに知的なメスなど入れたためしがないという。著者はその前提を許容すべからざる命題と捉え、次のように述べている。教育関係者には耳が痛い話かもしれない。

論証に先だって許容すべからざる命題を前提として採用するならば、どんなに緻密な推理の作用を押し進めていっても、ついに真Truthに到達することはないであろう。当面、許容すべからざる命題とは何か、と問われれば、わたくしは、教育に対しても今も《万能薬》のごとき効能を期待する近代国民国家の常識＝通念がまさにそれであり、制度としての近代学校教育がおこなってきた業績は結構ずくめ（「光と闇」のうちの「光」）の軌跡を印すとする見方こそそれである、と答えざるを得ない。教育には、世人

が期待するほどの《能力》は具備されていないし、ある場合、教育それ自身魁けて過失誤謬を犯すことさえ不可避である、と答えざるを得ない。(581頁)

著者は、「三育」イデオロギーに絡め取られず、《教育万能》という劇薬を仰がなかった人物の一人が牧口常三郎その人だったという。「はっきりと『知育偏重』の合言葉(記号)を相手どり、近ごろ徳育の風下(=下位)に知育を位置させたがる風潮が優勢だがそれは誤謬である、と主張し得た“最高の理知の人”も絶無ではなかった。本稿執筆者の知るかぎり、西田幾太郎・木村素衛(京都大学文学部教育学科主任教授)・牧口常三郎の三家が、勇気ある“理性人”の代表である」(578-579頁)。著者は、牧口が実際に『創価教育学体系』において「二育」の立場を貫いていることを資料に基づき示した後で、「三育」の虚偽性を、スペンサー『教育論』解釈の誤謬を糺すことよって、暴きだそうと試みている。紹介者には、すでに著者自らが暗示してきたように、牧口が理知的に「二育」に踏みとどまり得た理由には、彼がここでもヘルバルト教授学理論の本質を正確に捉え、それを踏まえ独自の加工を施していたからだと思えてならない(先生はこれに対しどのようにおっしゃるであろうか)。

「頑張る」という言葉と現象学左派

斎藤正二(以下、斎藤先生と表記する)の作品はそのどれもが日常性批判に貫かれている。それは、問われざる前提となった思い込みを理性のまなざしから打ち砕くことだ、とでも言えようか。たとえば、道徳教育こそ大事だというわたしたちの前に先生は立ちはだかり、「徳育はイデオロギー注入装置」として設備されたことを明らかにし、そして同時に牧口常三郎を参照しつつ、「知育こそ最重要であり、知育以外に教育はあり得ない」(580頁)との逆説を提示してみせる。また、教育とは善なる営みというわたしたちの思い込みを、D. H. ロレンスの作品の中で描かれる心性を分析し、そこに比類なき支配欲を重ね合わせることで、粉々に壊してみせる。忠君愛国の「やまとだまし」は表向きには消えてなくなっても、客観的=科学的に見れば、わたしたちの思い込みそのものは残存していることを教えてくれる。なぜなら、わたしたちは「やまとだまし」をいまだに武断主義的なイメージで捉えるが、実のところそれは「平安朝宮廷人に固有の女性的で平和な心ばえを言うのであり、時としては不正もやりかねない狡賢い人生処方技術を言う」(『やまとだましの文化史』講談社新書、1972年、4頁)からである。こうした日常性批判には次のような願いが込められている、と紹介者は推察するがいかがであろうか。『やまとだましの文化史』には次のようにある。

わたくしの本書起稿の意図は、露わなる反戦思想の提示にあるのではない。もっと単純に、その前段階に立って、日本人すべてが科学的思考をもつべきだとの願いを提示したかったまでである。未来の日本人が「やまとだまし」を生かして運用するにせよ、これを修正しながら活用するにせよ、これを無用のものとして息の根をとめてしまうにせよ、ともかくも実体を科学的に把握しておかないことには正しい判断および処置がとれないのではないかと提言したかったまでである。(『やまとだましの文化史』、4-5頁)

認識欠如の結末は判断の誤りと眼を覆うばかりの行為に帰着することもある。徳育の旗印が掲げられ、道徳を叩き込まれた素直な良い子は、自分のやっていることややろうとしていることに迷いはないかもしれない。でも、迷いが無いということは、結局は自分の頭で考える回路を遮断することと同じである。教育に潜む暴力性に気がつかないなら、精神的・身体的に締め上げ子どもに言うことを聞かせることを、(明らかな虐待を教育だったと開き直るような親のように)教育の名の下に正当化することもあるかもしれない。ひどい場合には、自分がやっている暴力を、いつまでも本人だけが悪いことをしてあげているんだと信じ続けることさえあるだろう。自分の頭で考える回路が焼切れた教師は、無反省に武断主義に彩られた「やまとだまし」を受容して、さらにそれにとどまらず、自分と同じ良い人間を育てるべく、進んで虚偽意識を子どもに叩き込むかもしれない。

そういった行為(あやまり)の出所は「実体を科学的に把握して」いないことにある、と斎藤先生は言いたかったのだと思う。紹介者は、ロマン主義の引力に吸い込まれそうな自分を、斎藤正二という鏡に映し直視して、可能なかぎり合理的思考に踏みとどまりたいと願うこともしばしばである。

理性は根拠に向け作動しその周りを行ったり来たりする。合理的であるとは根拠(理由)の妥当性が蓋然的であることだ、と言い換えられ得る。根拠(理由)の確からしさを構成するのが思考(問い考えること)だとすれば、理性的な人とは、その確からしさに向けて自分の頭で考え行ったり来たりしながら判断する人だということになる。

紹介者はここで、斎藤先生がよく「頑張るな」と力説されていたことを思い出す。たとえば、本書第一部第一章第四節には、「牧口常三郎は、はっきりと『頑張るな』『どこまでも忍耐努力なんぞの愚挙はやめよ』と提唱しています」(50頁)「頭を使わずに只管“頑張る”くらい《価値創造》に正反対の位置に在る愚劣誤謬はないことに気付けよ、ということに尽きます」(51頁)、そして『創価教育学を一言に要約すると、どうなる』といった虫のいい質問を受ける機会があります。そういうとき、即座に『頑張ることをやめよ、頑張らずに頭を使うよう努めよ、というふうに要約し得ます』と回答することにしています(48頁)などが、はっきりと語られている。

「頑張ることをやめよ」というのは、いわゆる「あなたを受け入れますよー」という全面受容系のセラピー的要請ではなく、「頑張る」=「頭を使わない」ことの間逆だから、「頑張らない」=「頭を使う」こと、すなわち「自分の頭で考えよ」との命法を意味している。正直に告白すると、斎藤先生が「頑張る」ことを拒絶されることに少しの違和感もなかったかといえ、それは嘘になる。はじめて耳にしたときには、「頑張ることはそんなに駄目かなあー」などと心の中で抗弁してみたものの、すぐに撤退・白旗であった。「頑張る、などという酷い単語が斯んなに大流行したのは、昭和戦中・戦後期に限られる」(48頁)ようだし、何せその酷い使われ方が先生の言われる通りだったから。

「遺(のこ)された声——録音盤が語る太平洋戦争」(2004年8月14日NHK放送)は、満州国のラジオ放送の録音記録が公開されたことを受け、それを題材した作品である。故郷を捨て(いや、正確には捨て去るように追い込まれ、あるいは騙されて)荒れ野原に立つ開拓移民は「何としても頑張らなけ

ればならない」との言葉を連呼する。開拓は現実に厳しい状況を語りつつも、最後はそれでも「頑張ります」というように話をまとめていく。理性的に考えればどう逆立ちしたって無理なことを、「頑張る」という思考遮断の荒業で飲み込み、自分自身をも偽らせる。自分も周りも納得させるには、きっとそうとしか言えないのだと思う。「子どもたちの戦争——戦時下の市民の記録」(2004年8月15日NHK放送)に登場する当時の軍国少女は、軍事工場となった高等女学校で、仕事に「何としても頑張らなければならない」、と歯を食いしばって「鬼畜米英」を打ち倒す弾丸製造競争に精を出す。自分が何をしているのか(実戦で使われるものを製造していること)については分かっている。しかし、その諸関連を想像・省察すること(頭を使って自分を相対化すること)は、「何としても頑張らなければならない」ことにとっては邪魔でしかない。でも、やはりこの少女もそうとしか言えなかったのだ。存在の無意味を受け入れることなど困難なのだから。誰が悪いとかそういうことではなく、「頑張る」という言葉の大流行は、みんなが思考停止をしていますよ、停止していなかったとしても、停止している振りをせざるを得ない社会関連にすでに囲まれていますよ、ということだったのだ。

斎藤先生はこの時代を実際に生きた。この原体験が彼に現象学者としての構えを取らせるのか。

けっきょく、現象学者の言うごとく、人間は自分では公正さや客観性を重んじたつもりでいても必ず何かの立場＝見地Einstellungに囚われて判断を下しているに過ぎない、すべての立場を排除して事物があるがままに直視するschauenようにせよ、ということに尽きる。(532頁)

「事象そのもの」に肉迫することは、すなわち理性的思考を貫くことである。思考停止の思い込みや開き直りとはまったく異質で、自分の過誤の可能性を認めつつも、事象の真実の姿を透かし覗こうと試みる指向性を手放さないことである。それは事象そのものに附着する張りぼてやメッキをはがすこと、すなわち語られる言葉の虚偽性を暴き出すことにつながる。だから理性的思考の堅持は、同時にそういうイデオロギー(虚偽意識)と隣り合わせの権力に対する批判に結び付く。ここに現象学左派が立ち現われる。

これらは斎藤先生から教えていただいたことである。もとより紹介者なりの理解にすぎず、きっと間違いだらけである。先生には遠くより厳しきご叱責を賜りたい。本書の「あとがき」の最後を読んだ紹介者は、先生のご健康をさらに強く祈らずにはおられない。

最後に編集の労を取られた伊藤貴雄先生(創価大学文学部准教授)に御礼を申し上げる。彼がいなければ、この高著は誕生しなかったことを書き添えておきたい。

(第三文明社、2010年)

注記：この新刊紹介に引用した『牧口常三郎の思想』からの文章は、著者斎藤正二によるルビ、強調のための傍点や下線を基本的に除いてある。紹介者が付けた傍点や下線が、著者のそれと重なり、読みにくくなることを避けるためだった。読者には著者の息吹を直に感じるためにも、実際に本文を参照することを是非ともお願いしたい。